

染色体異常個体の有病率と発生率に関する研究

7・1 新生児における染色体異常の発生率に関する研究—1

東京大学医学部

日 暮 真  
石 川 憲 彦  
飯 島 久美子

研 究 目 的

新生児における染色体異常の発生頻度に関する研究は、いまだ本邦においては報告をみない。そこで、われわれは年間分娩数の多い産院の協力を得て、昭和47年7月から継続して本研究を行なっている。

研 究 方 法

前年度より引き続き、東京都下某産婦人科病院（年間分娩数平均2,300）にて出生した全新生児に対し、性染色質検査（X染色質ならびにY染色質）を施行して性染色体異常児のスクリーニングを行なった。一方、常染色体異常に関するスクリーニングとしては、① 外表ならびに内臓奇形 ② 皮膚紋理 ③ 精神発達遅延（乳児期における各月令の検診）等を参考にし、疑わしいものについてのみ染色体分析を行なった。

研究成果ならびに考察

性染色体異常のチェックを目的として性染色検査を施行したものは、X染色質検査（女）2,054例、Y染色質検査（男）3,311例、X染色質検査（男）1,705例である。このうちTurner症候群（45, X）1例、Klinefelter症候群2例、XY Y個体3例、double Yのうち1本のYとD群染色体との転座例1例をみつけた。性染色体異常のスクリーニングの検体処理がややおこなわれているため、常染色体群の母集団数との差異が生じている。

一方、常染色体異常のスクリーニング対象は10,270例(男5,341・女4,929)で、この中から

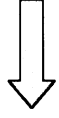
47, XY, +13	2	
47, XY, +18	2	}
46, XY / 47, XY, +18	1	
47, XY, +21	3	}
47, XX, +21	6	
46, XX / 47, XX, +21	1	10
46, XY, -G, t(Bp-:Gp+)	1	

の異常例を発見した。

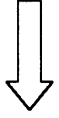
なお、身体徴候と精神発達とを手がかりにスクリーニングが行なわれているため、相互転座保因者はスクリーニングからもれる可能性があるのは、止むを得ない。

#### 発 表 論 文

Higurashi, M., Segawa, M., Matsui, I., Ihnuma, K. and Nakagome, Y. (1977). Screening for autosomal aberrations. Acta Paediat. Scand. 66. (印刷中)



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

新生児における染色体異常の発生頻度に関する研究は、いまだ本邦においては報告をみない。そこで、われわれは年間分娩数の多い産院の協力を得て、昭和 47 年 7 月から継続して本研究を行なっている。